

社団法人ゴルファーの緑化促進協力会調査研究

# 環境と人にやさしい ゴルフとゴルフ場

第21回

ゴルフ場を里山の自然を守る拠点に

森林ジャーナリスト 田中 淳夫



## 里山は人がつくった自然

ゴルフ場の自然を語る前に、里山について説明したい。

里山とは、単に人里に近い山ではない。森に加えて田畑や草地、裸地、溜め池、用水路、そして建物や道まで含んだ地域全体を指す。人々が、農林業などの営みを通じてさまざまな環境を生み出した土地だ。ここで重要なのは、人が手を加えたことによって自然が豊かになっている点である。

里山の森は、多様な木々が生え、適度に伐採されるため新芽や若木が多い。林内に光が射し込むからよく草が繁っている。耕され軟らかくなった土には、作物以外にも多くの動植物が生息する。石垣や建物の隙間も生物の棲家となる。定期的に草刈りが行われると背丈の違う草も生える。刈られた草は堆肥になる。また農地に水を引くために作られた溜め池や用水路は、水棲生物の宝庫だ。

さらに、違った環境が隣接することでも生物の種類は増す。たとえばホタルは、卵が川岸の石に産みつけられ、幼虫になると水中で過ごす。サナギは岸辺の土に潜り、成虫は樹木に止まる。交尾には飛翔できる空間も必要だ。どれが欠けてもホタルは生息しない。

オオタカなど猛禽類も、地域が全部森に覆われていたら、餌の小動物を獲れなくなる。田畑や道など地面の見える場所が必要だ。

里山には、これらの環境が全部揃っているのだ。だから生物多様性も高い。原



放棄された棚田

生林よりもはるかに多くの動植物が生息する。



## 森を増やしたゴルフ場開発

こうした里山の環境とゴルフ場を比べてもらいたい。

ゴルフ場は、敷地の半分以上を森林が占め、その間に草地が広がる。調整池や小川など水辺もある。バンカーという砂地さえある。こうした多様な環境の組み合わせった条件は、里山とそっくりではないだろうか。

ゴルフ場開発は、昔から森林破壊だと言われ続けてきた。たしかに開発途中ではそうした面もあるだろう。だが、数十年のスパンを置いて環境を調べると、里山に近い生物多様性が保たれていることがわかってきた。

実際の生物調査でも、想像以上に多くの種類が発見された。なかには地域の絶滅危惧種が見つかったケースもあるのだ。

ゴルフ場が建設されると、地域の森林面積が増えることも認められている。囲い込まれることで野放図な開発が規制され、荒地に樹木が育つからだ。周辺が住宅地などに変貌した結果、場内だけに森林が残ることもあるようだ。

いまだに根強い「ゴルフ場は自然破壊」という批判に反論できるデータは、すでに十分揃っているとと言えるだろう。



## 荒れる里山の駆け込み寺

ところで現在の里山は、冒頭に示したような理想的な状態の地域ばかりではない。

里山は人が手を加え続けなければ維持できないが、過疎高齢化が進んだため、人の管理が行き届かなくなっている。農林業が衰退して、耕作放棄が進んだところも少なくない。雑木林は密生しすぎて立ち枯れが目立ち、林内が暗くなって草も生えなくなった。定期的な伐採が行われず、長く放置された結果だ。

とくに竹や樹木の侵入によって、草地が大きく減少している。草地は、生物には森林以上に重要だ。葉だけでなく茎でも光合成を行うので、生産力は非常に高いからである。しかも草は虫の餌となり、虫は鳥獣類の餌になる。そうした連鎖が、豊かな生物環境を作るのだ。その草地



棚田が広がる里山の風景

が減少するのは大きな痛手だろう。

里山の自然は今、大きな危機を迎えているのである。

こうした状況の中で、ゴルフ場は里山環境の保全に大きな可能性を秘めているように思う。なぜならゴルフ場には、自然を管理する人と技術、そして設備が揃っているからである。

それは一義的にはコースのコンディションと景観の維持が目的かもしれない。しかし結果的に環境保全に役立っている。おかげで傷つき追われる里山の動植物にとって、ゴルフ場は、最後の駆け込み寺的な存在になりつつある。



里山と似ているゴルフ場の自然環境

## ラフの自然度を高める必要性

もっとも、手放して現在のゴルフ場を礼賛するわけではない。管理方法には問題もある。

残置森林部分は、景観に影響を与える部分は丁寧に手を入れられるが、コースから離れた部分は、放置されがちだ。もっと森林全体に目を配ってほしい。

では、草地はどうだろうか。

ゴルフ場には、グリーンやフェアウェイなどの芝生が広がっているが、そこを草地になぞらえるのは無理がある。草丈数ミリに刈り込まれた芝草に生物多様性を期待することはできない。

だが、ラフはどうだろう。さらに残置森林の周辺は。ここには芝草以外の草も生える余地がある。自然の草地に近い植生が残せるのではないだろうか。

残念ながら現在のラフは、さほど自然度が高くない。なぜなら刈り込み過ぎているからだ。5・0 cm以下まで刈られると、自然の草地に近いとは言えなくなる。

その点、海外のコースでは自然の草がそのまま生い茂ったラフも珍しくない。環境的にはその方が理想的である。

ゴルフ場の植生別面積の平均比率では、ラフが全体の26%を占める。森林も敷地の57%を覆う。だからラフの自然度を高めると、森林とラフを合わせた8割以上が豊かな環境になる。逆にラフを短く刈ると自然度が低くなり、フェアウェイなどとともに非自然的環境が4割以上になってしまう。

だから、ラフや森林の周辺部分をどのように管理するかが、非常に重要となってくるのだ。





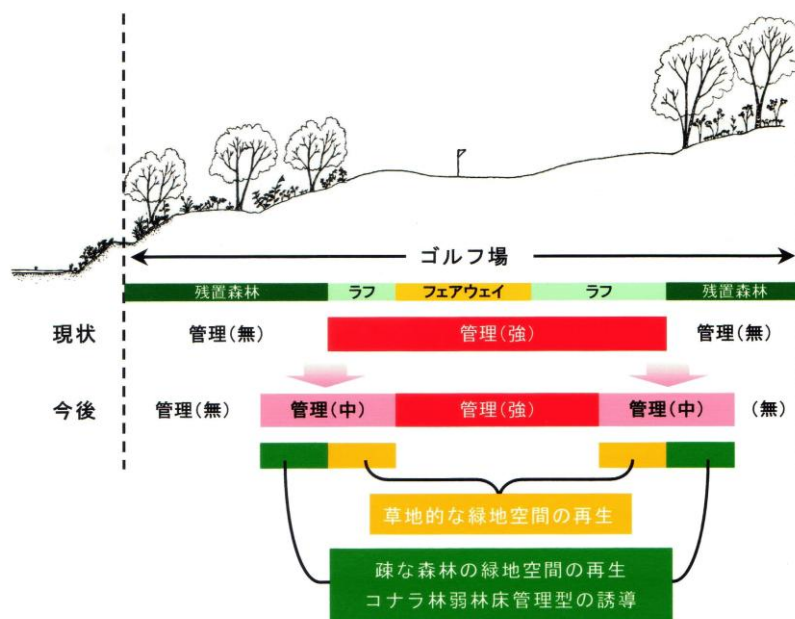
## ゴルフ場がイニシアティブを

今年は、国連の定めた国際生物多様性年。生物種の減少をくい止めるための手だてを考える年になる。10月には名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議が開かれる。

日本は「SATO YAMAイニシアティブ」と呼ぶ提案を出す予定だ。日本には、里山という人が手を加えることで自然を豊かにした環境があると示すと同時に、それを維持するノウハウがあることを伝えようというのである。

ゴルフ場も、この里山環境の維持に一役買い、また管理技術を蓄積・実践する場にできないだろうか。それを世間に発信できたら、イメージアップするとともに社会貢献にもなるだろう。

今後のゴルフ界の発展を考えると、目先の経営ばかりに縛られず環境を意識して長期的・俯瞰的な視野を持ってほしい。



生物多様性を高めるゴルフ場管理のあり方(作成:栗田英治氏)